

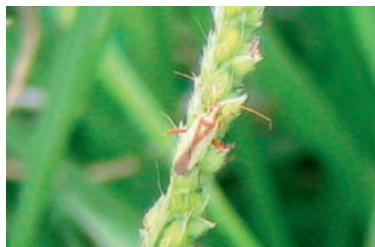
個々の農作業には、それを行う理由がある。水田畦畔の除草に関しては、主に雑草が「病害虫の発生源になる」と「農作業の邪魔になる」からである。「病害虫の発生源になる」という観点から、最近の全国的な傾向として、水稲における斑点米カメムシ類が大きな問題となっている。

斑点米カメムシ類(以後、カメムシ)には、アカスジカスミカメ(写真-1、2)、アカヒゲホソドリカスミカメ、クモヘリカメムシ(写真-3)、トゲシラホシカメムシ、オオトゲシラホシカメムシ、ホソハリカメムシ(写真-4)、ミナミアオカメムシなどがある。これらは、水稲の登熟期の穂に口針を刺し吸汁し(写真-4)、その結果、加害された米が着色米である斑点米(写真-5)となり品質低下となる。1等米での着色米の許容範囲は、1,000粒中1粒までであり、それ以上になると等級が下がる。カメムシの発生は年数回繰り返す。これらは、水稲が出穂するまでは、主として水田周辺部のイネ科植物に寄生し、特に穂を好む。最近の研究では、アカスジカスミカメはカヤツリグサ科の水田雑草であるホタルイにも寄生することが明らかになっている(写真-2)。関東地方における水田畦畔の主なイネ科植物は、春ではスズメノカタビラ、スズメノテッポウ、イヌムギ、ナギナタガヤ、ネズミムギ(イタリアンライグラス)、夏ではノビエ、メヒシバ、オヒシバ、エノコログサ、シマズメノヒエ、キシウスズメノヒエなどである。一方、水

稲コシヒカリの出穂は7月下旬～8月上旬である。このように、年中、水田内外には何らかのイネ科植物の穂があり、斑点米カメムシ類は餌には事欠かない。このため、水田周辺部の雑草防除は、カメムシ防除を行う上で極めて重要である。なお、イネ科植物は、出穂前は外見的に似ているため種の判別は難しいが、出穂後は、穂が種によって形態的に大きく異なるため識別ができる(写真-6)。

カメムシの数は水田内よりもその周辺部の畦畔などに多い。このことは、カメムシにとって、水稲の穂は餌の一つであることには違いはないが、ひょっとしたら、本当の好物は水稲よりも周辺部にあるイネ科植物なのかもしれない。また、最近の研究によると、カメムシの種類によりイネ科植物の中でも好き嫌いがあることがわかってきている。アカスジカスミカメやホソハリカメムシは、メヒシバやヒエを好み、エノコログサを嫌っている。その理由について、著者はエノコログサの小穂の基部にある長い毛がこれらの吸汁活動を妨げているのではないかと推測している。

カメムシは昼よりも朝夕に多く見られる。ある夏の暑さが和らいだ夕方、水田際に立ち観ていると、6mm程度のアカメスジカスミカメが畦畔際の水稲の間を飛び回っていた。小さな生き物であるが、放っておくと大きな被害をもたらす。小さなもの程、こわいものは無い。油断大敵である。



(写真-1) イヌビエ穂上のアカスジカスミカメ(2006年7月 石川県)



(写真-2) ホタルイ穂上のアカスジカスミカメ(2008年7月 愛知県)



(写真-3) メヒシバ穂上のクモヘリカメムシ(2007年8月 三重県)



(写真-4) 水稲穂上のホソハリカメムシ(2007年8月 愛知県)



(写真-5) 斑点米(左)と正常米(右)



(写真-6) 夏の主要なイネ科雑草の穂



CONTENTS

トマトの病害……森田泰彰 2
 トマトの害虫……嶽本弘之 6
 防除レポート……編集部 12
 GAPってなんだろう…編集部 14
 雑草雑話……徐 錫元 16

トマトの病害

高知県農業技術センター

森田 泰彰



(写真-1) 黄化葉巻病発病圃場



(写真-2) 苗に発生した黄化葉巻病



(写真-3) 黄化萎縮病

はじめに

トマトは全国各地で様々な作型で栽培されており、一年中収穫・出荷されている。高知県では、平野部での促成栽培や中山間地での夏秋雨よけ栽培を中心に栽培されている。ここでは、高知県で発生して問題となっている主な病害について紹介する。

黄化葉巻病 (写真-1, 2)

病原ウイルス: *Tomato yellow leaf curl virus*

(TYLCV)

はじめ葉が黄化しながら葉縁が巻き、やがて葉脈間も黄化して縮葉し、小型化する。症状が進むと株全体が萎縮症状を示す。発病株では開花数が減少し、開花しても結実しないことが多い。タバココナジラミによって伝搬され、高温期には感染後2週間程度で発症し始める。媒介虫の媒介能力は非常に高く、本病の防除には媒介虫の徹底防除が必要となる。殺虫剤による防除に併せて防虫ネットや黄色粘着資材などの物理的防除を行う。また、伝染源となる発病トマトは早期に除去し、適切に処分することも重要である。

なお、*Tobacco leaf curl Japan virus* (TbLCJV)などを病原とする黄化萎縮病(写真-3)も中山間地域を中心に散発しているが、症状が似ており病徴での判別は困難である。

青枯病 (写真-4)

病原細菌: *Ralstonia solanacearum*

成長点付近や一部の葉が青いまま萎れはじめ、やがて株全体が萎れて枯死する。高温期に感染・発病しやすく、夏秋期の栽培や高温期に定植する施

設栽培で発病が多い。防除には、抵抗性品種・台木の利用や根傷みさせない肥培管理が重要であるが、病原菌密度が高い場合には土壤消毒も併せて行う。また、一旦発病すると栽培管理中のはさみを介して伝染するため、株ごとにはさみの消毒を行う。

うどんこ病 (写真-5)

病原菌: (1)*Erysiphe cichoracearum*、

(2)*Leveillula taurica*

*Erysiphe*菌によるものでは、葉の表面にうどん粉をふりかけたような白いかびを密生し、やがて被害部の組織が黄化する。*Leveillula*菌によるものでは、葉の裏側がやや紅色を帯びた褐色に、表側は黄色から褐色に変色し、白いかびの発生は非常に少ない。露地栽培でも発生するが、主に施設栽培でやや乾燥した条件での発生が多く、10～11月及び3～6月に多発する。防除は殺菌剤による防除が中心となるが、多発後の防除は困難なため、発病初期の防除を心がけることが重要である。

萎凋病 (写真-6, 7)

病原菌: *Fusarium oxysporum* f. sp. *lycopersici*

はじめ下葉から黄化・萎ちようし、順次上方に進展してやがて枯死する。病原菌は根から侵入して導管を侵すため、茎を切断すると導管の褐変が認められる。発病には28℃程度が適しており、高温期の発生が多い。防除には抵抗性品種・台木の利用が有効だが、病原菌にはレース1～3が知られており品種に対する病原性が異なるため、適切な品種を選定する必要がある。その他、根を傷めない肥培管理や発病株の早期除去、土壤消毒などにも取り組む。



(写真-4) 青枯病



(写真-5) *Leveillula*菌によるうどんこ病(葉表)

(写真-6) 萎凋病発病圃場



(写真-7) 萎凋病の茎断面



(写真-8) 根腐萎凋病

根腐萎凋病 (写真-8)

病原菌: *Fusarium oxysporum* f. sp. *radicis-lycopersici*

症状は萎凋病に似ているが、萎凋病よりも根の褐変腐敗が著しく、地際部茎の導管褐変は萎凋病より低く15～20cm程度にとどまる。また、発生は低温期に多い。発病には低温による根の活性低下や塩類障害による根傷みなどの関与も大きい。防除には抵抗性品種・台木の利用の他、根傷みさせない肥培管理や土壌消毒などに取り組む。



(写真-9) 葉かび病

葉かび病 (写真-9)

病原菌: *Fulvia fulva*

葉に発生し、はじめ下葉の表側に淡黄色の小斑点を生じ、その裏側に灰黄色から緑褐色のピロード状のかびを生じる。病斑が拡大するとかびの色は灰褐色から灰紫色に変色し、葉の表側にもかびを生じてくる。多発すると葉は枯死、落葉する。発病は多湿条件で多い。防除には抵抗性品種が有効であるが、品種間に抵抗性の差があるので適切な品種を選定する必要がある。



(写真-10) すすかび病 (葉表)

すすかび病 (写真-10,11)

病原菌: *Pseudocercospora fuligena*

葉に発生し、はじめ葉裏に不明瞭な淡黄緑色の斑点を生じ、やがて灰褐色のかびを生じる。病斑が拡大するとかびの色は黒褐色に変色し、葉の表側にもかびを生じてくる。本病は葉かび病に類似しており、病徴での判断は困難である。発病は多湿条件で多く、防除にあ



(写真-11) すすかび病 (葉裏)

たっては、圃場が多湿にならないように留意する。

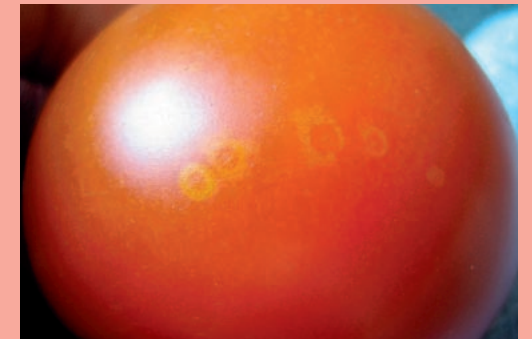
灰色かび病 (写真-12,13)

病原菌: *Botrytis cinerea*

病原菌は多犯性で、多くの作物に灰色かび病などを引き起こす。トマトでは果実や茎の腐敗や葉枯れ症状を引き起こす。なお、果実では開花後の花弁を足がかりに発病するため、花弁の残りやすいがく付近から腐敗することが多い。また、果実にゴーストスポットと呼ばれる白色円形の小斑点を生じることがある。多湿条件での発生が多く、施設栽培では降雨の多くなる3～4月の発生が多い。防除は殺菌剤による防除が中心となるが、耐性菌が発生しやすいため同一系統の剤は連用しない。また、換気などで湿度低下を図ることも重要である。



(写真-12) 灰色かび病 (葉での発生)



(写真-13) 灰色かび病によるゴーストスポット

トマトの害虫

福岡県農林水産部・経営技術支援課

専門技術指導員 **嶽本 弘之**



(写真-1) タバココナジラミの成虫



(写真-2) タバココナジラミの蛹



(写真-3) トマト黄化葉巻病の症状



(写真-4) オンシツコナジラミ成虫



(写真-5) オンシツコナジラミの蛹



(写真-6) オオタバコガの幼虫



(写真-7) オオタバコガによる果実被害

はじめに

福岡県では施設における野菜・花き類の栽培が盛んで、トマトも主要作物の一つである。本県トマトの主要な作型は促成栽培で、ピンク系大玉品種を10月に定植し、5～6月頃まで収穫する。ここでは、促成栽培で発生する主要な害虫を紹介するが、タバココナジラミが媒介するトマト黄化葉巻病が最も重大であり、現地では媒介虫のタバココナジラミ対策を主眼に置いた防除が組み立てられている。

コナジラミ類

タバココナジラミとオンシツコナジラミが発生するが、薬剤感受性の低い前者が優占種になっている場合が圧倒的に多い。両種の成虫は類似するが、タバココナジラミの成虫(写真-1)では、静止した時に翅先が重なり合わないが、オンシツコナジラミ(写真-4)は翅先が重なり合うことで区別できる。また、タバココナジラミの蛹(写真-2)は体色が黄色で、中央が膨らみ周辺部は薄いのに対し、オンシツコナジラミの蛹

(写真-5)は体色は乳白色で、全体に厚みがある。

コナジラミ類による被害として、直接吸汁による生育抑制、排泄物によるすす病の発生及びウイルス病の媒介がある。トマトでは、タバココナジラミによるトマト黄化葉巻病ウイルスの媒介が最も警戒を要する(写真-3)。このウイルスに感染すると、まず新葉が縁から退緑し、葉巻状となり、さらに症状が進むと葉脈間が黄化し、萎縮する。保毒虫(ウイルスを保毒した成虫)が育苗期～本圃初期に

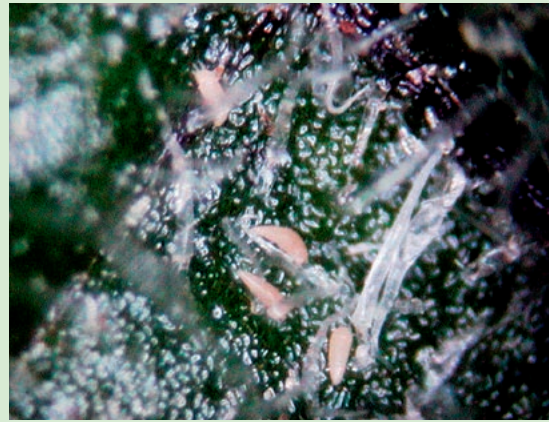
ハウス内に侵入し、増殖・感染を繰り返し、甚大な経済的被害を与える。トマト黄化葉巻病を防ぐためには、媒介虫のタバココナジラミに対する防除を徹底する必要がある。目合いの小さい防虫ネットの設置と定期的な薬剤散布が不可欠である。

オオタバコガ

成虫は夜行性。卵はトマトの成長点付近に1個ずつ産み付けられる。幼虫(写真-6)は緑色の場合が多いが、黄褐色～茶褐色と変異がある。若齢幼虫は新芽や蕾に潜り込むが、中齢以降は果実内に食入して激しく加害する(写真-7)。幼虫の齢期が進むと、薬剤の効果が低下するので、フェロモントラップなどの情報を活用して、発生初期の防除に努める。オオタバコガは低温に強く、栽培初期にうまく防除できないと、低



(写真-8) ハスモンヨトウの幼虫



(写真-9) トマトサビダニ



(写真-10) トマトサビダニによる被害



(写真-11) ハモグリバエによる被害

温期でもハウス内でだらだらと発生を繰り返すことがある。ただし、最近では防虫ネットの普及により、ハスモンヨトウとともに、多発生することは少なくなった。

ハスモンヨトウ

成虫は夜行性で、卵は展開葉の裏側に、卵塊として産みつけられる。ふ化した幼虫は2齢まで群生するが、3齢以降は分散する。幼虫(写真-8)は主に葉を食害するが、蕾や果実も好む。オオタバコガの幼虫は果実の中まで、食入するが、ハスモンヨトウは、頭部だけを果実内に入れて食害することが多い。防除の考え方はオオタバコガと同様で、フェロモントラップなどの情報を活用して、適期防除を行う。

トマトサビダニ

成虫(写真-9)は体色は橙黄色で紡錘形をしている。体は非常に小さく、肉眼では確認できない。トマトサビダニは高温と乾燥を好むため、栽培初期に発生するが多い。加害は株の根元から上方に進行する。加害を受けると葉や果実の表面が光沢を帯びたサビ色を呈し(写真-10)、下葉が枯れ上がる。さらに、加害が上位へ拡大すると生育不良となり、最終的には株が枯死する。毎年、発生する圃場や隣接圃場で

は、育苗後期から定植直後の初期防除を徹底する。

ハモグリバエ類

マメハモグリバエとトマトハモグリバエが発生する。両種は混発しているが、後者が優占種であることが多い。成虫は2mmほどの黄色っぽいハエで、産卵管で葉に穴をあけて産卵する。幼虫は葉に潜って食害するため、曲がりくねった線状の食害痕が現れる(写真-11)。老齢幼虫は葉から脱出し、土中で蛹となる。促成栽培トマトで

は育苗後期から本圃初期に周辺から施設へ成虫が侵入し、施設内で発生を繰り返す。したがって、施設内への成虫の侵入を防ぐことが重要であり、防虫ネットや紫外線除去フィルムの設置が有効である。



キラップ®



アカヒゲホソノドリカスミカメ



アカスジカスミカメ



ミナミアオカスミカメ

うまい汁は吸わせない！

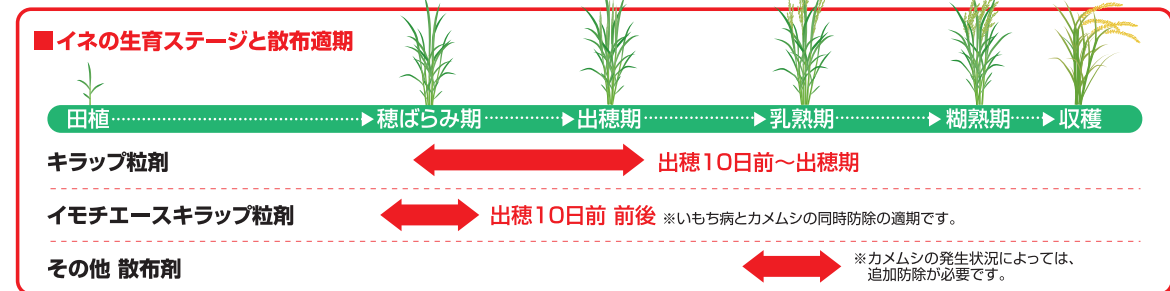
オオトゲシラホシカスミカメ

斑点米カメムシ類防除は、粒剤で！

キラップ粒剤は、近年問題の「斑点米カメムシ類」に対し優れた殺虫効果を発揮します。特に、アカヒゲホソノドリカスミカメのようなカスミカメ類に卓効を示します。粒剤タイプのためドリフトの問題もなく、斑点米カメムシ類の吸汁被害を予防することができます。あなたの水田のカメムシ類防除に、上手にお役立てください。



斑点米被害



キラップ® 粒剤

散布適期幅が広く、使いやすい粒剤。

- 近年問題の斑点米カメムシ類に対し高い効果。
- 長い残効性を有しているため、安定した効果を発揮。
- 「作業の省力化」と「ドリフトの軽減」が実現する、粒剤タイプ。

■適用害虫および使用方法 (2009年10月現在)

作物名	適用害虫名	10a当り使用量	使用時期*	総使用回数*	使用方法
稲	カメムシ類 ウンカ類	3kg	収穫14日前まで	2回以内	湛水散布

*印は収穫物への残留回避のため、その日まで使用できる収穫前の日数と、本剤およびその有効成分を含む農薬の総使用回数の制限を示す。



イモチエース®キラップ® 粒剤

「斑点米カメムシ類」と「いもち病・穂枯れ」を、粒剤で同時防除。

- 斑点米カメムシ類に加え、いもち病、穂枯れ、紋枯病の同時防除が可能。

■適用病害虫および使用方法 (2009年10月現在)

作物名	適用病害虫名	10a当り使用量	使用時期*	総使用回数*	使用方法
稲	いもち病 穂枯れ (ごま葉枯れ病菌) 紋枯病・カメムシ類 ウンカ類	3kg	収穫35日前まで	本剤のみ 1回 エチプロール 2回 メトミノストロビン 1回	湛水散布

*印は収穫物への残留回避のため、その日まで使用できる収穫前の日数と、本剤およびその有効成分を含む農薬の総使用回数の制限を示す。



共同で防除を行い効率よく薬剤を散布 青森県・平川市のりんご農家を訪ねました

浅黄色が美しい「トキ」は、甘くて果汁たっぷり

寒暖差のある気候と良質な土壌を持つ津軽平野の南端に位置する平川市は、青森県内でも高品質りんごを生産することで有名な地域。中でも広船地区はりんごの防除に対して農家が一丸となって取り組んでいます。りんご栽培の現状と対策についてうかがいました。

りんごの薬剤散布は春先が肝心 病害虫対策が品質を左右する

平川市を訪れた9月中旬は、特産である「ひらかつがる」の収



津軽みらい農業協同組合の平田敏幸さん

穫が終わり、木々には次の収穫期を迎える「トキ」を实らせていました。近年では、トキのように果汁が多く食味のよい新品種も多く出てきており、消費者に喜ばれているようです。また、農園の多くは今年度最後の薬剤散布を行い、収穫の最盛期に突入します。

平川市を管轄する津軽みらい農業協同組合(JA津軽みらい)の営農指導課・平田敏幸さんにりんごの病害虫と薬剤使用についてうかがいました。

「芽出から開花、落花の4月から5月は病害の季節。りんごの出来を左右する大切な時期なので10日から13日間隔で薬剤を散布します。特に発症しやすい病気が黒星病で開花から収穫まで葉・果実に被害が出ます。年間

の散布で一番重要なのがこの5月です。この時期に今年新規採用したオンリーワンは効果もよく使いやすい薬でした。暑さが増してくる6月になると害虫の動きが活発になり、リンゴハダニやナミハダニ、リンゴサビダニなどが寄生。ダニは葉を加害し、成長や色つきに影響を与えりんごの評価を落とす原因になります」。

今年の夏は日照時間が少なく雨の日も多かったため、薬剤の散布が計画通り行えなかった月もあり、6月のダニの薬剤は平年より水量を多く散布したといっています。

将来を見据えた共同防除で りんご農家を元気に

平川市・広船地区では共同防除を行う「広船共同防除組

合」を組織し効率の良い薬剤散布を行っています。組合長の長尾博人さんに組合と共同防除についてうかがいました。

「広船共同防除組合は平川市内でも3～4番目に大きい組合で、2007(平成19)年1月に嘉瀬沢防除、パイロット防除、内山防除の組織が合併して立ち上がりました。今年度の散布面積は48.55haで組合員数は54名、薬剤を散布するスピードスプレーヤー(SS)6台を保有。組合員の内32名はSSのオペレーターとして活躍しています。



真っ赤なボディのスピードスプレーヤーは助成金で購入

共同防除の良いところは短時間で効率よく薬剤を散布できることです。広い農園もみんな協力すれば時間と労力をかけずに済み、薬剤や機械の共同購入で経費も軽くなります。スプレー噴射とファンで効率的な散布が可能なSSは、一台600万円以上もする高価なもの。単独で購入するにはなかなか手の届かないものでも組織化することで入手可能になりました。

共同防除は高齢化する農業や担い手問題の解決になると



広船共同防除組合組合長の長尾博人さん

長尾さんは続けます。

「足腰が弱り始めた高齢者にとって広い土地に薬剤を撒くのは一苦勞。それを体力のある組合員で支えれば問題は解決します。そして農業の効率化・経費削減で見えてくるのは利益です。利益を確保できることが分かれば若者の労働意欲や農業への関心が高まります。実際、会社勤めの30代がUターンで家の農園を引き継いだという話もありました」。

さらに今後の重点事業としてあげているのが観光。長尾さんの農園でも5年前から地元の温泉旅館とタイアップしてりんご狩りツアーを開き、去年は約550人が来園。今年も11月中旬まで開催する予定です。

最後に今後の組合と防除についてうかがいました。

「りんごは品種による価格の差が大きく出てしまいます。安定した収入を確保するためにも組合内で均等にりんご作りが出来る仕組みが必要です。また過去16回の農林水産大臣賞を受賞しているりんご品評とわい化栽培・普通栽培の立木評価に対しても力を入れます。



青森県内の品評会で農林水産大臣賞を過去16回受賞

防除に対しては、今年の散布は終了しましたが、勉強会開催や講習会参加を積極的に行い、使用する薬剤の選定も吟味していきたいです。ちなみに6月に使用したダニゲッターは散布後ほとんどダニの発生が見られず追加防除がありませんでした。今後も使用を検討したいと思います」と長尾さん。共同防除でのりんご作り、そして地域農業の活発化を図る取り組みに期待がかかります。



ダニゲッターフロアブル



オンリーワンフロアブル

GAPってなんだろう？

バイエルクロップサイエンス株式会社
農業グラフ 編集部

最近よく耳にするようになった「GAP」。これっていったいどんな活動なんだろう…と思って調べてみました。

GAPとは？

GAPは、「Good Agricultural Practice(よい農業の実践)」の略で、適正農業規範または農業生産工程管理手法と言われています。

GAPは、生産者自らが、農業生産工程の全体を通して、食品安全や環境保全などの観点から特に注意すべき点検項目を定め、その項目を確認しながら農作業を行い、それらを記録・検証し、農作業の改善に結びつけていく手法です。

基礎GAPは、農産物の安全性確保のみならず、環境保全、農産物の品質の向上、労働安全の確保など継続可能な農業を追求するのに有効な手法であり、農業経営の改善・効率化の実現にもつながるものとされています。

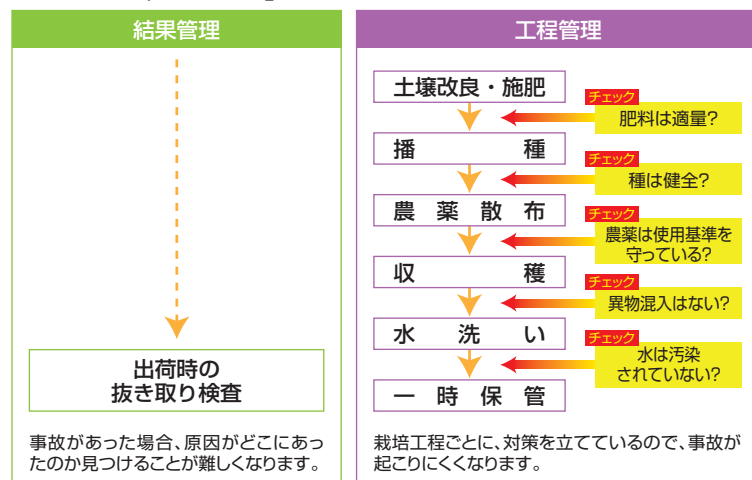
また、生産された農産物の安全性や品質の確保などについて

消費者・食品事業者からの信頼を得る上でも有効な手法となります。更に、コスト削減などの経営の観点からの必要事項も盛り込み、経営の改善につなげることができるようになります。

なぜGAPに取り組むの？

昨今おこった数々の食品に関する事件を背景に、安心・安全な食品を求める声が高まっています。農産物の安全性についてもそれは同じこと。安全な生産物であることがはっきりとわかる証明を求められるよ

サンプルを抜き取ってチェックする「結果管理」とGAPによる「工程管理」の違い



うになってきています。

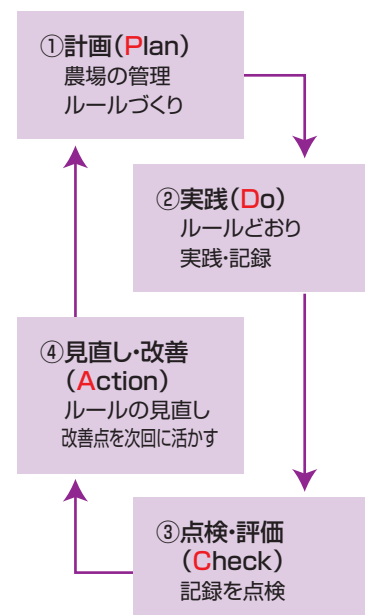
今までのように最終製品を抜き取り検査する従来の「結果管理」では、万が一問題があった場合、どこに原因があるのかを見つけるのが難しい上、検査対象にならなかった製品の安全性まで確認することができません。

GAPでは作業工程ごとに管理する「工程管理」の手法をとるため、想定されるリスクを排除し、チェックすることができます。

GAP導入のメリットは？

生産工程のチェックリストを作成するためには、その作業工程をしっかりと洗い出すことから始めます。チェックリストを作成すれば、なぜその作業をするのか、それがなぜ必要な作業なのかという作業の目的や意味を明確にでき、問題点や改善策をみつけ易くなります。そこから、農産物の安全性や品質の確保につなげることができ

ます。



GAPの取り組み状況において

「21世紀新農政2007」において、GAPを積極的に導入・推進することとし、平成23年度までに概ねすべての主要な産地(2000産地)においてGAPの導入を目指すこととしています。

平成19年12月末時点で、導入済みの産地(合意形成済みの産地を含む)が596産地、導入を検討中の産地が971産地となっており、ほとんどの都道府県で取り組みを開始していますが、今後一層のルール作りや農家・消費者へのメリットについても明らかにしていく必要があります。

ルールどおり実践したかを点検するチェックリストを作成したら、農作業を開始。

ルールどおり実行できたか、その都度チェックリストや記録簿を使って、確認・記録します。記録を点検、見直しを行い、改善点を次回の生産作業に活かします。

また、それらの記録は消費者・食品事業者への説明や問題が起きたときの原因究明にも役立つのできちんと保管しておきましょう。

取り組んでみたけれど…

GAPによる工程管理を始めると、作ったときには最善と思われたルールも実践してみるとリスクの検討が不備であった

り、修正したほうがより効果的な場合があります。

「もっとこういうルールにしたら、よかったかも」「もっと改善できる点があるのではないか」というように、作業ルールを常に見直して、より安全・安心な農産物生産を目指していくことができます。

ルールづくりは無理をせずにできるところから始めることがお薦めです。実践と改善の継続で、誰からも信頼される農業を実現できます。

参照：食品安全のためのGAP 策定・普及マニュアル(農林水産省 消費安全局) 埼玉県農業農産物安全課ホームページ 平成20年7月15日 農林水産省生産局生産技術課より

表紙/作物の花 マンゴーの花 (撮影 山口卓宏/解説 編集部)

マンゴーの原産地は、インドからインドシナ半島周辺と推定されている。インドでは、マンゴーは既に紀元前1500年ごろの神学書に優れた果実との記載があり、ヒンズー教の各種儀式には欠かせない果実として登場している。現在では、500以上の品種が存在すると言われている。インド、メキシコ、フィリピン、タイ、オーストラリア、台湾が主な産地。日本では、沖縄、宮崎、鹿児島、和歌山、熊本で主に栽培されている。日本で栽培されている約96%がアップルマンゴー(アーウィン種)である。マンゴーはウルシ科に属する植物で、ウルシ同様にかぶれを引き起こすことがあるため、注意が必要である。

農業グラフ No.178 2009年10月発行 ©2009 Bayer Crop Science K.K. 不許複製 発行人・高梨裕美子 バイエルクロップサイエンス株式会社 東京都千代田区丸の内1-6-5 Tel.03(6266)7386 Fax.03(5219)9733 編集人・大洋印刷株式会社 PR事業本部 株式会社シークルーズ 印刷所・共立印刷株式会社

●お問い合わせ、送付希望のご連絡等は上記まで